

手足の不自由な子どもたち

はげみ

令和5年度/No.409

4/5

April—May



第41回(令和4年度)肢体不自由児・者の美術展入賞作品「職業 数学者の未来」
座安 希空

特集 ミラコン2022
〜未来を見通すコンテスト〜
第5回プレゼンカップ全国大会特集号



はげみ

令和5年度 / No.409

4/5

April — May

特集 ミラコン2022 ～未来を見通すコンテスト～ 第5回プレゼンカップ全国大会特集号

目次

Contents

- 広場 ミラコン2022 ～未来を見通すコンテスト～
第5回プレゼンカップ全国大会特集号の発刊にあたって…………… 伴 光明 … 2
- Sec.1 第1回プレゼンカップ(ミラコン) から技術支援に携わって…………… 堀口 明子 … 4
- Sec.2 ミラコン2022 ～未来を見通すコンテスト～
「第5回プレゼンカップ全国大会 FINAL STAGE」…………… 8
- Sec.3 ミラコン2022 第5回プレゼンカップ FINAL STAGE 発表作品 …………… 13
- Sec.4 ミラコン2022 第5回プレゼンカップ 地区大会について …………… 35
- Sec.5 特別講演
バリアバリュー ～障害を価値に変える～ …………… 垣内 俊哉 … 49
- コラム サクラ咲く ～ミラコン挑戦を足掛かりに～ …………… 田村 康二郎 … 53
- 今号の表紙 …………… 座安 希空 … 54

※今号掲載の所属等は令和4年12月現在のものです

広場

ミラコン2022

未来を見通すコンテスト

第5回プレゼンカップ

全国大会特集号の発刊にあたって

全国特別支援学校肢体不自由教育校長会 会長

伴 光明

全国特別支援学校肢体不自由教育校長会（以下、全肢長）は、昭和34年に全国肢体不自由養護学校長会として現在の組織の形になりました。昭和32年に4校東京都立光明養護学校（現：東京都立光明学園）、大阪府立養護学校（現：大阪府立堺支援学校）、愛知県立養護学校（現：愛知県立名古屋特別支援学校）、神戸市立友生養護学校（現：神戸市立友生支援学校）の校長会が発足したことがその前身です。平成19年に現在の団体名称となり、令和3年度の会員校数は226校となっています。全肢長の事業は校長自身が学校経営の力量を高める相互研鑽が一つの柱であり、もう一つの柱は、「肢体不自由児の学校教育の振興」、すなわち、教育内容や教育方法を研究し、高め、発信し、全国各地で行き届いた肢体不自由教育が展開するように図っていくことです。

令和4年12月14日「ミラコン2022」未来を見通すコンテスト「第5回プレゼンカップ全国大会」（大会実行委員長：都立光明学園田村康二朗統括校長、大会事務局長：都立小平特別支援学校阿部智子校長）を、予定通りに開催することができました。平成30年に産声を上げたこの大会は、プレゼンテーションを競い合うカップ戦です。全国七つのブロックに分かれて、

ブロック内で競い合い、その代表者がさらに全国で競い、最も優秀なプレゼンテーションを行った方が最優秀賞に輝きます。この構図は、さながらスポーツにおける地区大会、全国大会のようでもあります。

プレゼンカップの草創期、この事業を企画した校長たちには、「肢体不自由校の生徒にも、『甲子園』のような栄えある競い合いの場が作れないものか」という願いがあったと聞いています。その願いの一翼は、スポーツの分野で「ボッチャ選抜甲子園」という大会に結実していきます。そしてもう一翼が、肢体不自由という障害があっても広く社会に訴求することができる「言語能力」の向上を目指す「プレゼンテーション」を競う場の創設という流れになっていきました。グローバル化する社会を生きていく生徒たちの言語能力を伸ばし磨いていくことは、重要な教育内容です。この内容をいかに生徒たちが我がこととして向き合い、思考を深めていけるものか。「競い合い」の要素が入ることは絶妙な手立てでした。もともと「弁論大会」や「少年の主張」といった取組例は学校教育の中にあり、読書活動の高まりに応じて、ブックトークやビブリオバトルといった取組

を盛んに行う中学校、高等学校もみられるようになりました。しかし肢体不自由校で「準ずる教育課程」を履修する生徒は、1校当たりではそう数多くは在籍していません。ICTを活用し初めから学校外に対戦相手を求めるという形式は斬新かつ有効であり、対戦相手が全国につながっていることで、生徒や指導する教員のモチベーションが向上、望ましい競い合いに挑んでいく形ができたのです。挑戦する姿勢は他の生徒への好影響、保護者の主体的な応援、学校教育活動への関心の高まりといった好循環をもたらします。諸先輩の慧眼に恐れ入るばかりです。そして第3回からは、最優秀賞には文部科学大臣賞が贈られることとなり、そのモチベーションは益々高まりを見せています。

プレゼンカップは平成30年に始まり、5年間「ミラコン」という愛称とともに育ってきました。令和元年の年末に全世界を襲ったパンデミック、新型コロナウイルス感染症の世界的流行は学校教育にも甚大な影響を与え、我が国においても学校が数か月間の臨時休業を余儀なくされる事態となりました。中学校、高等学校の部活動の大会が軒並み中止される中、ミラコンは毎年を重ねていくことができました。これは、大会運営方法が元々参集を前提とせず、オンラインとの親和性が極めて高かったことによります。現行の大会方式は、決勝戦である「ファイナルステージ」でメイン会場（今回は改修なった都立光明学園アリーナ）と参加者のいる各校をオンラインでつなぎます。その運営には毎年、株式会社沖ワークウエルの皆様に献身的な支援をいただいています。

地区大会は地区ごとに若干の運営方法の違いはあるものと思われませんが、基本的には「ディスク1枚に魂を込めたプレゼン」を注入することです。この1枚を作成するまでに、参加生徒

は何回も推敲を重ね、指導者は本人の着想、表現を大切にしながらより良いプレゼンに向けた指摘や示唆を行います。各学校でこの作業を丁寧に行うこと、自分の言いたいことが他人にどのように映るか、どうすれば的確に言いたいことが伝わるか、といったことをとことん考えて構成していくことは、まさに「主体的対話的な深い学び」の発露です。地区を勝ち抜いたディスクはファイナルステージ運営校に送付され、そのままのプレゼンが上映されます。各校では参加生徒とその応援団（横断幕や鳴り物が出てくることもあります）が固唾をのんでメイン会場の様子を視聴しています。

オンラインを前提とした大会運営が定着するにつれ、「ピンチをチャンスに、障害を価値に」、と毎年のように大会で参加生徒たちを激励して下さっている、ミラコンの名付け親でもある垣内俊哉氏の言葉が改めて心に沁みってきます。垣内氏が経営する株式会社ミライロの事業はオンライン活用で顧客を増やしてきておられます。学校教育にもオンライン活用が進む中、肢体不自由教育がもともと志向・試行していた遠隔教育の方法が有効であることが図らずも証明された格好です。

このように、ミラコン・プレゼンカップの開催は、肢体不自由教育の振興を目指す全肢長の事業の中でも極めて重要な位置を占める存在となりました。今回の大会では当事者の視点から社会のバリアフリー化への提言をすることに留まらず、社会に内包される貧困や地域格差の問題を扱うプレゼンテーションをする生徒が出てきました。肢体不自由教育を振興し充実させていくことは、より良い社会の形成に寄与するものとなる、と確信できる内容でした。全肢長はこの流れを止めることなく、ミラコンをさらに強固に社会に向けて発信できる大会に育てていきたいと願っています。